

浄土

monthly JODO

6

2018
June



貧乏董

さげべ(提瓶) 残欠

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

連載 23

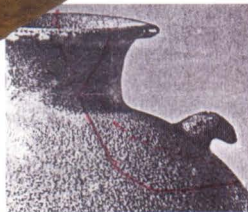


上の写真は内側

下の写真はほぼ原寸



右と下は、提瓶が収められた箱に入っていたメモと、提瓶の解説のコピー。写真には残欠の割れ目部分が赤線で示されている



昭和60年6月
福岡県松岡町 小原代所
有山林 山本 正

提瓶・平釜・横釜
これらは須恵器に特有な器形である。提瓶は六世紀を中心に平釜は、六世紀後半から出現する。横釜は前代からあるが、前二者が七世紀前半で消失したのちも存続する。いずれも腰部成形時の回転軸をはずした部位に、口頸部をとりつけてある。提瓶はその名のとおり、水筒のようになされる。その肩には横・縦・ボタシ状のものを二個一対つけてある。平釜にもボタシ状の脚りがある。しかし、のちのものでは、コ字形の脚りにかわり、口頸部も漏斗状になる。横釜は器体が縦に傾いているところから、横釜とも呼ばれる。傾きつけた例はめずらしい(図16)。こうした例があるところをみるとさげることもあるであろう。生活道路から検出した例(図14)では、底部が膨らんでいる。

去年の秋、所用で京都に行った。日帰りのつもりだったが、翌日が北野天満宮で毎月二五日に開かれる骨董市の日だとわかり、一泊することにした。貧乏人はシティホテルや温泉宿には泊まれない。探してみるとカプセルホテルがいろいろある。北野天満宮行きのバス停のすぐ側にあるホテルに決めて予約を入れる。当日用事をすませ、錦市場を散策。骨董も好きだが、市場も好きなのだ。市場内の安そうな呑み屋に入り、夕食を兼ねてほんやり酒を呑む。京都は初めてである。高校生のとき修学旅行は奈良、大阪、京都方面だったが、集団生活にはなじめないのさげだった。

初めての土地での独り酒はいいものである。しかし、明日は朝が早い。ホテルに行くとか客は外国人ばかり。それも欧米人の若者が多い。昔風に言うとかバックパッカーか。男はみんな若いくせに髭をはやしている。ロビーでノートパソコンを広げて、SNSの書き込みに余念がない。寢床は畳一枚より少し広いくらいの蛸壺である。まあ、値段を考えればそんなものだろう。翌朝六時半に起床。ホテルの前から北野天満宮行きのバスに乗る。一日乗車券が五〇〇円である。活用しない手はない。金閣寺や竜安寺も見てみたいし。北野天満宮の骨董市で三〇〇〇円で買いたいの、写真の須恵器の残欠である。手

作りの粗末な紙の箱に「さげべ」と書かれて置いてあった。蓋をあけてみると、須恵器の残欠と一緒に、解説のコピーが収められていた。何かの本からとったものだろう。

さげべについては、その解説を参照していただきたい。わたしがあれこれ、ない知恵を絞って書いたところで、この解説以上のもののはじめない。ひとつ言えば、紐を通す耳がやがて実用的な役割を越えて、装飾となっていく過程が、人間と道具の関係を保証して面白。

浄土

2018/6月号 目次

世界はもっと豊かだし 人はもっと優しい	森達也	2
連載 響流十方	小村正孝	12
連載 江戸の川を歩く②①	森 清鑑	16
連載小説 渡辺海旭⑧⑧	前田和男	22
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	31
編集後記		32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会主催 平成二十九年

平成二十九年六月二十二日

於 増上寺慈雲閣

森達也氏講演会

世界

はもつと

豊かだし

人

はもつと

優しい

その
二

集団化が起きたとき、もう一つ起きたことがあります。厳罰化です。厳しい罰これが起きます。なぜかという、これほどの邪悪な、危険な存在がいる。自分たちの生活を脅かしているのであれば、これに対抗するためにどうするか。セキュリティを強化する。監視カメラをつける。そうした発想は当然生まれます。警察官をいっぱい増やす。さらには罰を重くする。こうした発想になります。

厳罰化は今、世界的な傾向です。当初は日本、アメリカ、イギリス、ニュージーランドが厳罰化の代表国でした。つまり、単純に言ってしまうと、罪と罰のあんばいが前と変わってきたのです。

一昔前であれば、例えば「人を二人殺しました」「だったら、懲役二十五年」とかで社会的に折り合いがついたのです。今はつきません。「もっと重い罰を与えろ」、そういった傾向がとも強くなっています。

本音は、もうそうした危険なものは排除したい。抹消させたい。そうした気持ちが強くなっています。これは今言ったように、世界中が今この不安と恐怖を抱えていますから、世界的な傾向です。厳罰化がどんどん進んでいます。

ここまで言う、多分今日聞いている方の中には、そうは言ったって、これだけ今治安が悪化しているし、死んだ人も増えているから仕方ないと思う方もあるでしょう。

つい数日前も、あれは東京でしたっけ、女性が一人夜道を歩いていて、後ろからいきなり後頭部を殴られて、いまだに理由も何もわからないままです。幸い一命はとりとめたようですが、そんな事件もありました。もうこんなに物騒な状況で、厳罰化も仕方ないだろうと思う方がいるかもしれません。

本当に治安が悪化しているのかどうか。治安というものはどう考えればいいか。これは

結構難しいのですが、一番シンボリックなのは殺人事件の件数です。

日本は毎年警察庁が発表します。なぜか去年の分はまだ警察庁が発表していないので、二年前二〇一五年の話ですが、九百五十六件。これは認知件数といえます。警察庁が認知した殺人事件です。

実は、この中には殺人未遂も入っています。無理心中も入っています、警察は全部入れてしまうのです。本来それは分けるべきだと僕は思うのですが、なぜか警察は分けません。データというのは比較しなければ意味がありません。これが戦後の流れの中でどういった数字かといえは、これは戦後最少です。言いかえれば、二年前、この国の殺人事件は戦後最も少なかったのです。

そしてそれはたまたま二年前がそうだったのではないのです。毎年この国の殺人事件は戦後最少を更新しています。一番多かったのは一九五四年です。三〇八一件ありました。

今、人口が相当増えていますから、人口比にしたら、今はピーク時の四分の一です。でも、これは多分知っている人は少ないのです。メディアもほとんどこういった報道をしません。

なぜメディアが報道をしないか。「危ない、怖い」と言ったほうが視聴率が上がるからです。部数が伸びるのです。「危なくない、恐くない」と言ってしまうと、皆んなチャンネルを変えてしまうのです。

人はそういう生き物です。今もしこの場で誰かがあちらの方で「危ない！」と言ったら、皆んなそっちを向きます。不安や恐怖にとっても弱い生き物ですから。メディアは別に隠そうとしているわけではないけれども、視聴率を上げたい、部数を伸ばしたい、その市場原理の中で、自然に不安を、恐怖をおおってしまいます。

その中で、今ほとんど殺人事件が減っているということは、できればあまり言いたくない。増えているとはさすがに言えません。減っているともなかなか言いません。その結果として、一般の人々は、もうこんなに社会が不安定になっている、治安がよくない、であれば当然、厳罰化も当たり前だと思いう世の中になっています。

今から五年前にノルウェーに行っていました。こうした厳罰化が世界の大きな流れになっている状況で、北欧は逆で、寛容化に進んでいます。刑罰をどんどん軽くしているのです。

なぜそんな状況になっているのだろうと思ったときに、ちょうどNHKから「取材に行きませんか」という依頼があったので、喜んで行ってきました。

オスロ刑務所に行きました。僕を案内してくれたニルス・クリスティはオスロ大学の教授です。犯罪心理学の世界的な権威で、彼の本は日本でも何冊か翻訳されています。その彼に案内されて、オスロ刑務所に行きました。オスロ市内の住宅地の中にある刑務所です。どちらかといえば、ドラッグとか傷害とか、そうした罪を犯した人たちが入所しています。では、ノルウェーで重い罪、人を殺したり、そういった人はどこに行くのかというと、島に行きます。

そしてノルウェーの刑務所は囚人に休暇があるのです。大体三日から五日間、年に一回は彼らは家に帰ります。別に保護司とか、誰もつきません。「休暇を取って帰ってこない囚人はいないのですか」と聞いたら、「今まで一人もいません」と言われました。

ノルウェーにもう三十年在住という、ナラさんという女性コーディネーターに話をいろいろ聞きました。かつてはノルウェーも厳罰化だったのです。でも、今はどんどん寛容化の政策を進めている。そういった話を聞きました。

現在ノルウェーでは死刑はありません。というか、ヨーロッパではどの国も死刑は基本的にないのです。ベラルーシという国以外は全て、EUは死刑廃止が加盟条件ですから、イタリアもフランスもドイツもウクライナもロシアも全部、ロシアとウクライナはEUではないですが、死刑はありません。

ノルウェーの場合は終身刑もあります。最高刑は禁固二十一年です。どんなに悪いことをしても禁固二十一年です。

ナラさんに「かつて厳罰化だった理由は何ですか」と聞くと、「治安がやはり悪かったから」。「では、今はどうなんですか」と聞いたら、「寛容化にして、随分治安がよくなりました」と。

「では、ノルウェーというのは、例えば殺人事件は年間どのくらい起きているのですか」と聞きました。

さて、そこで彼女は何と答えたでしょうかとクイズです。ヒントは、さっき日本の話をしました。日本は二年前の統計が年間九百五十六件です。では、ノルウェーはどのくらいでしょう。

ナラさんはそこで僕にこう言いました。「殺人事件は年間どのくらいかしら。たしか一件か二件です」。びっくりして、そのあとにこの取材で法務省の役人にも、高級官僚にもインタビューしました。

そうすると、彼はこう言いました。「確かに故殺、つまり殺す意思があつて殺す事件、それは年間一件から二件、ただ傷害致死、過失致死を入れれば二十から三十件くらいかな」と。それにしたって、日本は九百五十六件ですよ。何とノルウェーは治安がいい国なのだろう。本当に街を歩いても、警察官なんてまずいません。監視カメラもほとんどありません。

でも、帰りの飛行機ではっと気づきました。さて、何に気づいたでしょう。つまり、僕の今の説明で、何かおかしいのです。もう一回言います。日本は九百五十六件、ノルウェーは二十から三十件。ノルウェーは日本より治安がいいか、です。

人口が違います。分母が違います。日本は人口一億三千万弱。ノルウェーは五百万です。分母が全然違います。あとで時間があつたら、ちよつと自分で計算してみてください。

実は日本のほうが治安がいいのです。日本の治安のよさはほぼ世界一です。多分アイスランドをもう抜いて、世界一になっていると思います。

EU各国は、大体人口と殺人事件の割合は日本の三倍から五倍です。ドイツでも、フランスでも、イタリアでも。韓国は二・五倍、中国は五倍ぐらいです。アメリカに至っては日本の十倍以上です。殺人事件の割合ですよ。日本ほど殺人事件が少ない国はないのです。ところが、日本ほど不安と恐怖を皆んなが持っている国もそうないです。だから、大学なんかの友人で犯罪学をやっている人が、例えば学会で外国の研究者に質問されるそうです。「日本はこれほど治安がいいのに、なぜいまだに死刑があつて、厳罰化なのだ」と。答えようがないと彼は笑っています。ここはそういう国です。

ノルウェーは罪と罰の概念が全然違います。僕もノルウェーに行くまでは、罰とは何か、つまり人に迷惑をかけたから、人をあやめたから、その償いとして自分が苦しむ、これが罰だと思っていました。

ノルウェーではその発想はありません。犯罪者はさんざん苦しんできている。苦しみを与えても仕方ない。犯罪者はなぜ犯罪を起こすのか。これは共謀罪の議論にもつながりますが、なぜ一般の人は犯罪を起こすのか。

そのノルウェーの法務省の役人は僕にこう言いました。犯罪者には三つの不足があるからと言うのです。一つ目の不足は幼年期の愛情の不足、二つ目の不足は成育期の教育の不足、三つ目の不足は現在の貧困。ほとんどの犯罪はこのどれか、あるいはこのうちの幾つかが複合して起きてしまうということです。

では、犯罪を起こした人に対して社会は何をするべきか。その不足を補えばいいのです。愛情と教育、そして今の生活環境、それを正しくすれば犯罪は減るはずです。

それを実践して、実際にノルウェーは、日本ほどではないにしても、治安がどんどんよくなったのです。

今ここでその話を聞いても、今のこの国から見れば、余りにもファンタジーに近いですよ。でも、現実にごうした国があるわけです。ノルウェーだけではありません。

ノルウェーを横目で見ながら、スウェーデン、フィンランド、デンマークで、全部今、寛容化を進めています。その結果として、治安がどんどんよくなっている。そうした状況があります。

四年前かな、五年前かな、ときのノルウェーの法務大臣が来日したときに対談しました。これは岩波書店の『世界』という雑誌に載せられましたが、そこで彼はこう言ったのです。「決してこれはヒューマニズムと思わないでほしい。自分たちは極めて合理的に、寛容化をしたほうが治安がよくなるから、とっているのです」と。なかなか日本の場合、その合理性を持ってないのです。

ところが、ノルウェーに僕が行った翌年二〇一一年七月に、大きな事件がありました。覚えていますか、ノルウェーの連続テロです。

アンネシユ・ブレイビクという極右思想を持つ男が、ノルウェーのオスロで、まずは市

庁舎を爆破して、八人を殺害、その次に子供たちがサマーキャンプをやっている島に彼は行って、そこでマシンガンを乱射して六十九人の子供を殺害します。たった二日間で、計七十七人です。恐らく戦後最も短期間で多くの人を殺害した事件です。

このときは日本の新聞も、「ノルウエーで死刑復活」という記事を書いた新聞もあります。僕もノルウエーにはたくさん知り合いができたので、この事件を知つてすぐにメールしました。

「日本では死刑復活という説があるけれども、どうなんですか」と。全員から返事が返つてきました。「全くそんな報道はありませんよ」と。

これは結局誤報だったのですが、この事件が起きたとき、さっき言った法務大臣はこの事件、テロがあつたときの法務大臣です。彼にも話を聞きました。彼はテロがあつた翌日に、この島に首相と一緒にヘリコプターで行っているそうです。翌日ですよ。だから、まだ遺体が全部散乱しています。

本土からフェリーで子供たちの親が全員駆けつけました。もう全員、我が子を抱きながら泣き叫んでいます。地獄絵図です。そこにアンネ・シュ・ブレイビク、加害者の母親がフェリーに乗って、花を持ってやってきたのです。

そこで何が起きたか。それは法務大臣が教えてくれたのですが、その加害者の母親を遺族の母親が取り囲んで、全員で抱き合つて泣いたそうです。遺族の母親の中には、加害者の母親に向かつて、「あなたが一番つらいわね」と声をかけた人もいたそうです。

このときに十四歳か十五歳で、難を逃れた少女がいます。彼女が外国のメディアの取材でマイクを向けられて何と言つたかと言うと、「一人の男がこれほどの憎しみを見せるのなら、私たちはそれを上回る愛情を見せましょう」と言いました。

この言葉はその三日後にノルウェーの首相が国民向けのスピーチで引用しました。

その結果として、ノルウェーは愛情を示します。このアンネシュ・ブレイビクの裁判はこの二年後に確定しましたが、禁固二十一年です。七十七人殺害して、禁固二十一年です。二年前かな、これはちよつと新聞に載っていたけれども、そのアンネシュ・ブレイビクが獄中で「大学教育を受けたい」と言い出したのです。オスロ大学が応じました。だから今、アンネシュ・ブレイビクは大学生です。

もう本当に、聞きながら、一体どこの世界の話なのだろうと、皆さん思うかもしれない。でも、現実には今この瞬間、この世界で起きていることです。ノルウェーだけではありません。北欧は全般、こういう傾向です。日本の場合はどうでしょうか。大分違います。

ただ、ノルウェーの場合、出所するときに条件があります。十五年、二十年、有期刑を受けて出所の際に、二つ条件があります。それをクリアしていないと出所できません。

どんな条件か。帰る家があること、仕事がある事です。でも、もう十年も十五年も刑務所に入っていれば、普通ないですよ。

その場合、どうするか。国が保証します。家と仕事を斡旋します。その上で出所させます。

日本の場合、どうか。例えば、四十ぐらいで罪を犯します。二十年間刑務所に入りました。出るときには六十です。懲役の場合は刑務所の中で労働します。

ただ、この労働というのは、実は労働基準法の労働ではなくて、懲罰ですから、これによって与えられる報酬というのは時給に換算したら多分三円とか四円とか、そういう金額です。

でも、そのお金で受刑者は刑務所の中で、歯ブラシを買ったり漫画本を買ったりバジャ

マを買ったりするのです。出るときにその蓄えをもらえます。でも恐らく、二十年いたとしても、もらえるお金は二十万円とか、そんなものです。

想像してください。六十です。出所します。日本の場合、大体犯罪者は身内から縁を切られます。当然帰る家なんかありません。アパートを探すしかない。でもアパートを借りるにも、敷金、礼金でもう二十万円なんてあつと言う間に消えてしまします。

では、仕事はどうするか。ハローワークに行きます。今時もう六十近い男でハローワークに行つて、しかも前科持ちで仕事が見つかるかどうか。まず見つかりません。

住むところもなかなか決まらない。仕事も決まらない。年はもう六十。何します？ 結局、コンビニに行つて、おにぎりを盗んで、捕まるのです。日本は、治安はともいいいけれども、再犯率が異常に高い国です。当たり前です。社会が追い込んでいるから、一旦過ちを犯した人を受け入れようというからです。

もちろんノルウェーはキリスト教圏で、カトリックの国ですから、仏教的思想はないはずです。でも、何かつながるものがあります。つまり、罪を犯した人、悪いことをした人、等しく救われなければならないという思想です。

たまたま罪を犯した人は、それだけの要因があつたから、罪を犯したのです。そうした要因がなければ、その人は罪を犯していません。そうした意識があります。

本来、日本も仏教国ですから、そうした意識を持てばいいのだけれども、なぜか日本の場合にはむしろ勧善懲悪です。悪いことをしたやつは許すな、そうした思想がとても強くなっているのです。

(つづく)

森 達也 (もり たつや)

ドキュメンタリーディレクター、ノンフィクション作家。明治大学特任教授。

著書

『「A」撮影日誌—オウム施設で過ごした13カ月』現代書館、『放送禁止歌』解放出版社、『世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい』晶文社、『「自分の子どもが殺されても同じことが言えるのか」と叫ぶ人に訊きたい：正義という共同幻想がもたらす本当の危機』ダイヤモンド社

響流十方こうるじつぽう

宿縁しゆくえん空くうしからざれば同じき一蓮いちれんに坐せん、浄土けんとの再会さいかい甚だ近きにあり。今の別れは暫しの悲しみ、春の夜の夢のごとし。

(法然上人『御流罪の時、門弟に示されける御詞』)

この世で結ばれたご縁がかりそめのものでないならば、往生のあかつきには、同じ蓮うすなの台に一緒に座りましょうね。お浄土での再会は間近なのですから、今、ここでのお別れも一時の悲しみ、春の夜に見る夢のようなものです。

心身を律せよ

冒頭に掲げたご法語は、実は当欄の小生担当分で今回が二度目の登場である（前回は二〇一二年六月号）。いま、ある本を読んでいたら出てきたのだが、その瞬間に抱いた感想は、以前からこの法語に対して抱いていたものとは違う、というか、正反対のものだった。そしてなぜか次の瞬間に、「そういえば、『浄土』の原稿、次（6月号）はジブンじゃなかったっけ!？」と、突如頭をよぎり、しかも締め切りなどに過ぎていることも思い出したのであった。

またやってしまった。たいてい、こうだ。自身に呆れながら、「この感想を原稿にしろ、ということなのかも」などと勝手な解釈をし、忘れないうちにとカバンからゴソゴソとPCを出して新幹線の中であわててキーを叩いている、という顛末なのであります。

前置きが長過ぎました。

この言葉は、『阿弥陀経』に説かれる「俱会くえい一処いつしよ」がもととなまっていることは明らかであろう。後鳥羽上皇から、宮中の女官にょかん二人を弟子が出家させたと嫌疑をかけられ、念仏停止を言い渡されたうえに四国流罪の宣旨せんじが下された法然上人。出立にあたり、泣く泣く見送る弟子たちに向けて語った言葉だ。見送られる上人も、見送る者たちも、これが今生の別れになるであろうことは覚悟し

ていたに違いない。もはや、仏が用意してくれた、念仏をとなえる者は浄土での再会が果たされるという約束を頼みとするしかない。この約束があればこそ、不条理に満ちたこの世を生き抜いていこうとの思いにもなれるではないか――。

人間、生まれてくるときは誰もが、ひとり。もつとも、この世に生まれ出れば、家族に囲まれ、地域の人たちに見守られ、学校で、職場で、さまざまな関係が結ばれ、「ひとり」ではなくなる。しかしそれは永続ではない。どんなに親しい人も、死出の旅路には添うてはくれない。添いていくたくても、かなわない。

独り生まれ 独り死に 独り去り 独り来たる。

〔無量寿経〕

たった一人で死に去っていく先が、もしも、暗く、寂しく、険しい、闇のような世界だったら……。想像したただけでぞっとする。自分が行くのも、見送る誰かが行くのも、だ。しかし幸いにも、明るく、なごやかで、やさしい世界――を仏は準備してくれている。しかも、先だった縁のある人たちと再び会えるという。阿弥陀仏の俱会一処の誓いは、先立つ者、見送る者、いずれにとっても、さまざまな意味で「ちから」となる。

しかし今回はふと、妙なことを考えた。

その極楽浄土というところからは娑婆の様子が見えているのだろうか——見えているに違いない。

ということは、私の言動の一つ一つが把握されているということだろうか——きつとそうなのであろう。「六神通ろくしんづう（超人的な六つの能力）を得て、十方界じっぽうかいにかえつて、苦の衆生を救摂くしやうせん」と善導大師も仰せではなかったか。

とすれば……ちよつと、困ったことになった。再会もうれしさ半分、怖さ半分、である。複雑だ。私がいずれ向こうに行つた際には、すでに六神通を得ているであろう父親からも、七年前に見送つた同級生からも、祖父母からも、果ては直接存じ上げぬ先祖からも、「お前は、いついつ、どこどこで！」と怒鳴られるかもしれない。仮にニコニコと迎えられても、それはそれでコワイ。なぜなら、こちらの生前のすべてをご存知であらせられるのだから。その笑顔を素直に喜べないのは、自身にうしろめたさがあるからにほかならない。

俱会一処くゑいいつしよのもう一つの意味。それは、自らの行為を律すべきことの示唆なのではないだろうか。「諸惡莫作しよあくまくさ 衆善奉行しゆぜんぶぎやう 自淨其意じじやうごゐ」の過去七仏の教えは、浄土教ではこんなかたちで説かれていたのである。

（小村 正孝）

江戸の川を歩く

多摩川中流域

多摩川の流れる羽村から福生に着く。広い河川敷の中を幾筋もの流れが緩なしている。州から州へ、漁師は渡ることができる。一本化した流れの処は、船による「渡し」の往来。羽村から下流の丸子の渡しまでが中流域。そこまで両側から多数の支流が流れ込んでいる。これらの支流は主として多摩丘陵と武蔵野台地からの流れである。故に、多摩川水系はダイナミックな風景を演出。江戸湾に向かって右岸方向の多摩丘陵からは、平井川、秋川、谷地川、根川、浅川、程久保川、

大栗川、三沢川が。左岸方向の武蔵野台地からは、残堀川、野川、仙川・丸子川、谷沢川が流入しているといった案配。

本流は、福生に着く。河川敷はさらに広がり、右から平井川が流れ込んでいる。この川は、日の出山の南斜面から流れ出、日の出町を通り、「あきるの」で北からの流れを加え、多摩川に入る。

やがて本流は昭島へ。するとここでは右側から秋川が合流。秋川は支流の中で最も大きく、それ自体、水系を形成している。

第二十二回

森清鑑

江戸ウォーカー

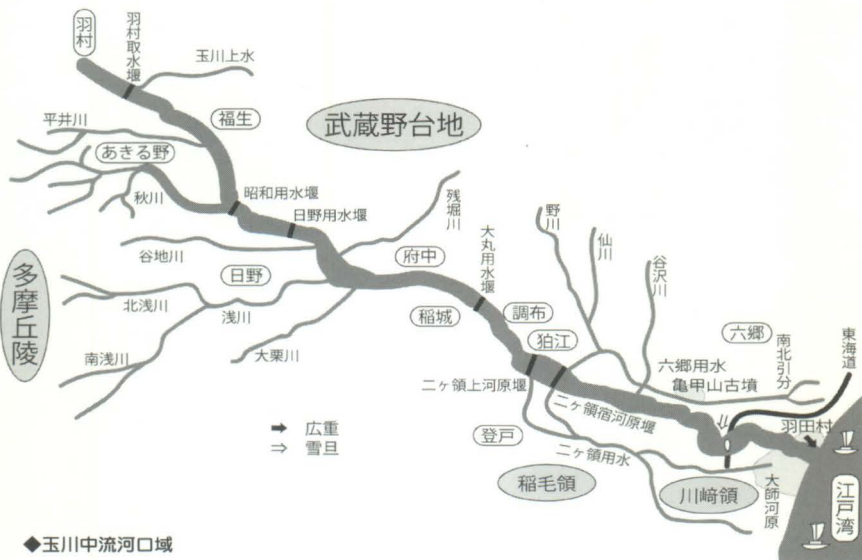
秋川合流、昭和用水堰

秋川は、三頭山の南東を水源とし、二つの支流を加え、本宿へ。そこで北秋川が入り込み、その後も四つの支流を加え、昭島で多摩川に流入している。その辺り、幾筋もの流れが緩なす水の都といった光景。江戸時代、この辺りから幾つもの田畑を潤す用水が引かれていたからに他ならない。

多摩川と秋川の合流点には、羽村（玉川上水）に続く大きな取水堰、昭和用水堰がある。これは昭和十八年に施設、現在の大規模コンクリート堰（昭和三十年）になったが、すでに室町時代から堰があり、江戸時代に、竹籠に石を詰めたものを積み上げて造った堰を大改築。昭島、拝島（立川）、大神など九ヶ村の田畑を潤す、いわゆる「九ヶ村用水」を引いたのである。取水堰とは、水を堰き止め、取水口を設け、用水を田圃に流すシステム。

日野用水堰

そこから僅か二・七キロ下流にあるのが、日野用水



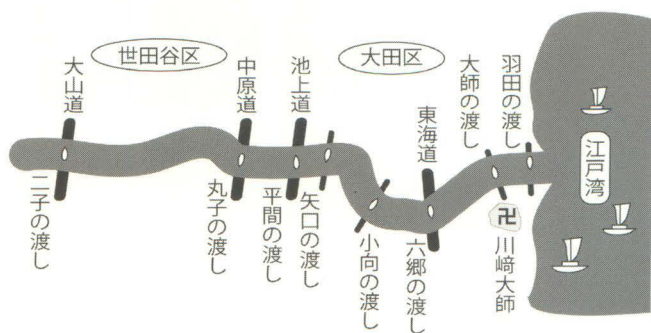
◆玉川中流河口域

堰である。この辺り、多摩川は、広い河川敷の中を幾筋もの複雑な流れが綾なしている。そして州と州を繋ぐ堰が設けられる。これが日野用水堰。そして江戸期、日野一带は「多摩の米蔵」と呼ばれるに至る。それもこれも日野の田畑全域に網の目のように日野用水が流れていたおかげ。この用水の歴史は古く、一五六七年に開削。多摩川に架かる、現在の日野用水堰は、昭和三十年に完成されたものだが、江戸期にはこの前後に二つの堰が設けられ、上堰用水と下堰用水となって日野の田畑に流れ込んでいたのである。

この堰から少し下流に行くと、右から谷地川が流入。これは、八王子、戸吹辺りを水源とする川。ちよつと下ると、今度は左側から武蔵野台地、瑞穂町狭山ヶ池を水源とする「残堀川」が流れ込む。

浅川

さらに下流へ。府中。右側から流れ込む大きな川。これが浅川。水源は陣馬高原の和田峠付近。上流は、案下川と呼ばれ、これに小仏峠を水源とする小仏川、高尾山から来る案内川が合流、浅川となる。日野田園



◆多摩川河口部の渡し

の南側を走り多摩川へ。この間、浅川には各所から支流が流入。秋川と同様大きな水系を形成している。

大丸用水堰

多摩川は稲城に到達。ここにあるのが大丸用水堰。江戸初期、この取水口から大丸用水が開削（総延長七

十キロ。登戸^{とうと}辺りまで。この取水堰も、石を入れた竹蛇籠を積み上げたもの。

二ヶ領上河原堰

さらに大丸から六・六キロ下流の稲田堤にあるのが有名な二ヶ領^{にかりょう}上河原堰（上の口）。これは二ヶ領用水のために造られた取水堰である。多摩川はこの堰から大きな中之島を形成しており、過ぎると川幅はぐんと広がり、またすぼむ。すると宿河原（登戸）。ここに設けられたのが二ヶ領宿河原堰（下の口）である。この二つの取水堰から流れ出ているのが二ヶ領用水。家康は江戸に入ると、すぐにこの掘削を命令。二ヶ領とは、稲毛領と川崎領のこと。一五九七年用水奉行小泉次大夫^{じだゆう}は工事を開始（関ヶ原の三年前）。十四年の歳月を経て、一六一一年（慶長十六年）に完成。その結果、稲毛領三十七ヶ村、川崎領二十三ヶ村、二千町歩を潤す水路が完成。「上質な稲毛米」は、江戸の台所を満たすことになる。この用水は、要するに江戸湾に出入る、多摩川と鶴見川の間を巡らせた水路である。

六郷用水

時を同じくして、多摩川の左側を通した用水が六郷用水である。この工事も小泉次大夫が現場監督したので、江戸の人々は「次大夫堀」と呼んだ。流路は、二ヶ領宿河原堰近くの取水口から粕江を通り、武蔵野台地南端から多摩川に注ぐ、野川、仙川を利用し、南下。二子玉川で大山道^{おほやまみち}を突っ切り「二子の渡し」を右に見て上野毛を南下。等々力溪谷を形成し、多摩川に入る矢沢川を突っ切り丸子川へ。多摩川縁に出て亀甲山古墳前を通過（東急多摩川駅）。中原街道を突っ切り、沼部駅、多摩堤通り沿いに走り、西嶺町観藏院下を通る。これが当時、切通しの急な坂道。しかも堅い岩盤を最大七・五メートル掘削するという最大の難工事。挙げ句の果てに次大夫は、若い女性を応援に駆け出して現場の男達を活気づかせたという。そこでここを「女堀^{おんなぼり}」という。

それから環八に沿って南下、千鳥町三丁目まで東へ。すぐ用水は、南北に分かれる。北堀（池上、大森方面）と南堀（蒲田、六郷）。この地点を南北引分^{ひきわけ}という（石

碑)。

百年後の一七二五年、多摩川全体の理想的な河川工事を完成させた天才、田中丘隅(休愚)が、二ヶ領用水と六郷用水の大改修工事を実施している。かくてこの二つの用水は画期的な農産物量を江戸市民のため、生み出したのである。

河口に向かって「渡し」

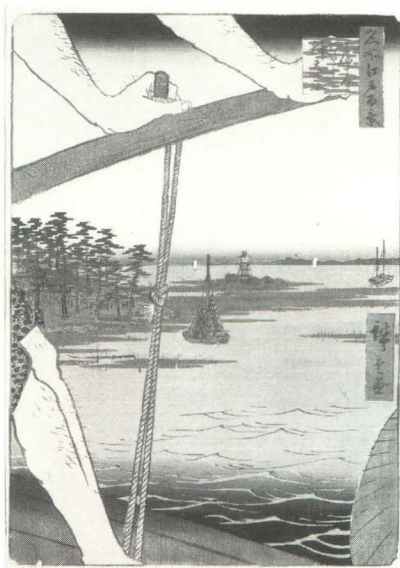
左に亀甲山古墳を見て、ここから多摩川は滔々たる一本化された流れとなり、羽田空港沿いに江戸湾に出る。最初に目につくのは丸子の渡し。江戸時代、多摩川に橋はなく、交通の要衝には、全て渡し船が用意されて人々は渡った。例えば、二子の渡しは、大山道。大山詣での旅人は船に乗って対岸へ。同じく、丸子の渡しは、中原道を繋ぐもの。

ここから江戸湾に出るまでの景色は正に雄大。多摩川八景の代表格。江戸の幹線道が多くある、この地点には渡しが大繁盛。丸子の次が「平間の渡し」。池上道と川崎を結ぶ。そして「矢口の渡し」。古戦場。新田義興を奉る新田神社参拝客が船に乗る渡し。これは

今、多摩川大橋。そして東海道を繋ぐ「六郷の渡し」。

六郷の渡し

滔々と流れる多摩川はここで大きく蛇行する。目の前が川崎の宿。家康は、初めて多摩川に、橋を架ける。大工事。一六〇〇年関ヶ原。武士は東海道からこの橋を渡って戦地に赴く。当時、六郷大橋は、千住大橋、両国橋を合わせ、江戸の三大大橋となる。ところが蛇行している故に、度重なる洪水に見舞われ、流されては架けるの、繰り返し。ついに一六八八年幕府は船による渡しを決断。その後、江戸時代、ここに橋が架け



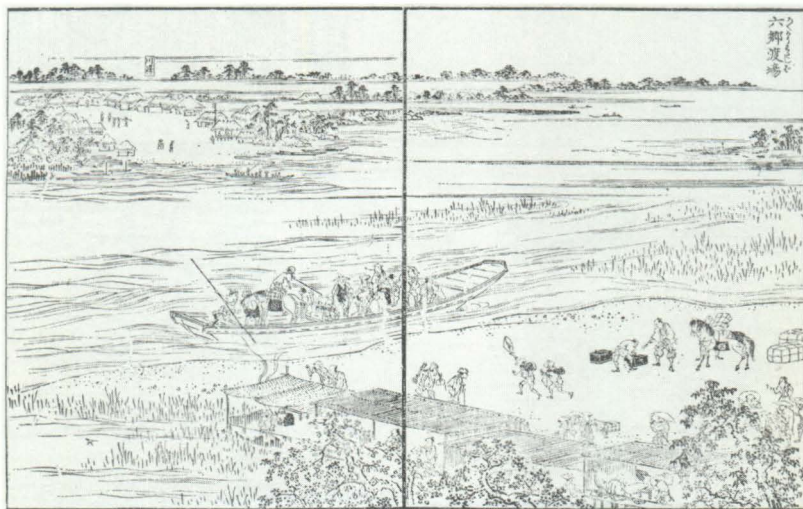
◆広重：はねだのわたし弁天の社

られることはなかった。これが「六郷の渡し」である。多数の渡し船が常に行き交い、東海道を旅する、客で一杯。船頭数は二十八人に及ぶ。

次が「大師の渡し」である。川崎江戸湾沿いの大師河原にある川崎大師への参詣客は多く、人々は葦の原を通過して船に乗り川崎に渡る。今は、大師橋。そして最後が「羽田の渡し」である。

目の前に江戸湾が開け、遠く房総半島、浦賀が霞んで見える。絶景。大型帆船、荷船が漂い、羽田弁天の先端には、常夜塔が灯る（燈台）。海にせり出た広大な干潟は、潮干狩りに最適。ここでは鳥が無数に飛び交い、海洋生物の宝庫である（一部は現在も）。

羽田の渡しの行く先は、川崎大師。大師河原から海まで塩田があった。江戸時代、多摩川は漁獲、農産物、建設の砂利採掘、飲料水の提供、豊富なミネラル成分を江戸湾に提供し海苔栽培の宝庫。正に、母なる川であった。



◆雪旦：江戸名所図会：六郷渡場：対岸は川崎の宿。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第八十八回

第三部

充実と稔りの白秋へ

『仏教社会主義者』 毛利柴庵



「大逆事件」の衝撃

十一年ぶりに帰国した渡辺海旭は、「浄土教報」の主筆に復すると、権力闘争にうつつをぬかす一部宗門内の「墮落分子」を筆鋒するどく指弾した。しかし、その裏には、彼らの存在を容認している宗門だけでなく、日本の宗教界全体が、いま日本社会が直面している「大逆」に対してあまりにも無自覚であることへの不満と苛立ちが隠されていた。

その「大逆」を象徴する事案こそ、海旭が帰国して二か月後、幸徳秋水ら社会主義者・無政府主義者二十六名が明治天皇暗殺を企てた容疑で検挙され、その後一方面的な公判審理を経て翌年一月に半数が死刑を執行された、世にいう「大逆事件」である。

海旭を苦悩させたのは、検挙者のうちに三人の僧侶が含まれ、さらにかつて海旭と共に仏教革新運動に加わった「同志」たちにもその容疑が及びそうな気配があることだった。

したがって、この件について直接的かつ軽々に発言することは、彼らにも類を及ぼしかねない。そこで、一部宗門内の「墮落腐敗分子」を指弾するところで「寸止め」にして、「今起きている事案をわが一大事として受けとめよ」と暗にほめかそうとしたのかもしれなかった。

マルクスを筆名に健筆を揮った毛利柴庵

帰国したとたん起きたいわゆる「大逆事件」を不可解な思いで受けとめた海旭が、もっとも心配をしたのは、「新仏教徒同志会」で知り合った毛利柴庵のことであつた。

そもそも柴庵とは、いかなる人物か。

海旭とは、生年が明治五年であることをはじめ、境遇も人生の歩み方も、さらには思想的な立ち位置も、実に似通っていた。柴庵は和歌山県は新宮（海旭は東京浅草）に生まれるが、幼児期に父と死別（海旭は廃嫡）、十三歳（海旭は十五歳）で寺へ預けられて得度。

生来利発なため、高野山の「学林」である高野山中学（海旭は浄土宗学東京支校）へ入学を許され、さらに同大学林（現・高野山大学）（海旭は浄土宗学本校、現・大正大学）へ進み、首席（海旭は総代）で卒業すると、和歌山県は田辺の高山寺（海旭は深川の西光寺）の住職を拝命する。そのいっぽうで、田辺で創刊された『牟婁新報』（海旭は『浄土教報』の主筆にも就任する）。

東京で海旭が高島米峰や境野黄洋らと仏教革新をめざして「新仏教徒同志会」を興すと、柴庵も和歌山から馳せ参じ、米峰が編集人をつとめる機関紙『新仏教』の同人となり、そこで海旭と出会い、親交が生まれる。

柴庵は『新仏教』と友好関係にあった『平民新聞』に拠る堺利彦、木下尚江、幸徳秋水ら社会主義者とも交流をもつようになり、自身も「仏教社会主義者」を標榜するようになる。そして、海旭がドイツへ飛び立つのと機を一にするように、田辺へ戻り、『牟婁新報』

の主筆に復すると、大阪平民新聞社にも出入りし、その機縁で、『牟婁新報』に幸徳秋水、堺利彦らを寄稿させ、さらに彼らの「同志」である荒畑寒村と後に大逆事件に連座し女性でただ一人処刑される菅野スガ（須賀子）と共に同紙の記者に迎え入れる。また、自身も明らかにカール・マルクスから採ったと思われる「マークス」を筆名に「反権力」の健筆をふるい、『牟婁新報』は和歌山の片田舎にありながら、明治期の社会主義の一牙城として獅子吼し異彩をはなつのである。

ただし柴庵は、明治期の脱亜入欧下の社会主義者の類型から逸脱しているところがあつた。明治三十八年にはじまる日露戦争にあつたのは、『平民新聞』と『新仏教』の同人のほとんどが「戦争は日露両国民を戦火にさらし不幸をもたらすからするべきではない」との「国際主義的非戦論」に立ったのに対して、柴庵は「強権のロシア帝国を倒すことは日露両国民に幸をもたらす」との「主戦論」

を唱えた。その点でも、ドイツから同様の「主戦論」を『新仏教』に寄せて物議をかました海旭と相通じるものがあった。

さらに柴庵は、国が強引に推し進める「神社合祀」によって破壊される「鎮守の森」を守るための論陣を張り、これが機縁で地元出身の著名人、南方熊楠と堅い絆を築いていく。ここには、「反権力」と「天皇制擁護」が同居するもう一つの柴庵の立ち位置があり、これもまた海旭の生涯にわたる「行動原理」とも通底するものがあった（ただし海旭の場合「反権力」というよりも「在野主義」というべきかもしれない）。

柴庵が「九死に一生」を得たわけとは

以上縷々説明・紹介をしてきたが、要するに、毛利柴庵という人物は、あまりにも「多面・多元的」すぎて、ひとつの「類型」に括りあげるのはきわめて難しい。だが、他方で、何事につけても「とにかく過激かつ行動的で

ある」という点ではきわめてわかりやすい人物であった。したがって、当然にも、時の為政者との軋轢は避けられず、ついに舌禍事件を引き起こし、反政府的な言論を封殺するための「新聞紙条例違反」の「官吏侮辱罪」に問われて、明治三十九年三月、投獄される。それは二月近くにわたり、高野山へ僧籍を返上することになる。

遠くドイツの地でそれを知った海旭は、「新仏教」に次のような激励文を書き送ったことから、柴庵を「同類」と見ていたことは明らかであった。

「毛利柴庵の入獄は、新仏教史に特筆大書すべき一大功業也。第二世出で、第三世第四世之に続き、罪弥重く、刑益厳なるに迫りて、新仏教の光彩方めて赫焉日の如く、寰宇（世



左：毛利柴庵 右：南方熊楠

の中」のこと)を照灼せむ。ブラボー柴庵！」
〔『壹月全集』下巻、四四〇頁〕

柴庵の決起で、第二、第三、第四の柴庵がこれにつづけば、「お上」の弾圧はますます強く厳しくなるだろうが、われらが新仏教運動は、ますます満天下を明るく照らすことになる。よくぞやった、柴庵よ！と、絶賛のエールを送ったのである。

海旭以外の同人たちにも海旭の熱が伝播したのだろう、同年の『新仏教』六月号は「毛利柴庵入出獄記念」と銘うたれ、杉村縦横、境野黄洋らと共に、編集長の高島米峰が「前科者毛利柴庵」という刺激的なタイトルでこんな逆説にとんだ「檄」を寄せている。

「悪人必ずしも法に問はれずして、善人却つて刑に処せらる。今の世、悪人たる是歟、善人たる非歟。人恐らくは迷はむ。畏友毛利柴庵兄、この度いよいよ前科者となつて、戸籍に赤い肩書を有する身分となりぬ。僕のこれを芽出度しといふは、この事偶々以て、如上の疑

問を解決し去るを得べしと信ずるがためなり」

そして、この柴庵の入出獄事件から三年後、海旭は十一年ぶりに帰国、おそらく柴庵との再会を楽しみにしていたところ、「大逆事件」が勃発。五月に幸徳秋水が逮捕された二月後、海旭が抱いていた心配が的中、『牟婁新報』の新宮支社に自宅を提供していたクリスチャンの赤ひげ医者・大石誠之助が幸徳秋水と共に謀した容疑で逮捕され、柴庵も家宅捜査を受けることになり、再会どころではなくなるのである。そこで、「奇跡」といつてもいいかもしれない「不可思議なこと」が起きる。柴庵の盟友で『牟婁新報』の常連寄稿者でもあった大石は逮捕されたまま起訴され絞首刑に処されるが、柴庵は三年前とはちがつて、投獄もされず起訴もされなかったのである。「過去の行状」からして、柴庵のほうがよほど「お上」に睨まれていたはずなのに、「九死に一生を得る」ことができたのは、いったいなぜなのだろうか？

ひょっとして、地元における柴庵の最大の支援者であった南方熊楠が、裏で「しかるべき筋」に働きかけてくれたおかげかもしれない。というのも、熊楠は、後に昭和天皇が田辺に行幸の折りに天皇自身から乞われて「御進講」をしたことからもうかがえるように、権力の最も奥深いところと深くつながっていたからだ。しかし、それを裏付ける確たる資料を得ることはできなかったので、「熊楠口利き説」は、あくまでも筆者の妄想に止めておこう。

さて、このようにして海旭の畏友である毛利柴庵は崖っぷちで命を拾ったわけだが、幸徳ら「平民社の危ない人々」と関係が深かった高島米峰ら海旭の仲間たちは未だに官憲から目をつけられており、海旭の周辺の「ざわつき」はいっこうに収まる気配はなかった。

仏教者が天皇暗殺を企図する不可解

ところで、海旭の関心は畏友の毛利柴庵だ

けに向けられたわけではなかった。柴庵とはちがって一面識もなかったが、「大逆事件」に連座して検挙・起訴された三人の僧に対しても、なぜそんなことになったのか不可解な思いを抱きながら、深く心を傷めていた。

三人の僧侶とは、箱根町大平台の曹洞宗林泉寺住職の内山愚童（当時三十六歳）、和歌山県新宮の浄土真宗大谷派浄泉寺住職の高木顕明（当時四十二歳）、三重県南牟婁郡の臨済宗妙心寺派泉昌寺留守居僧の峰尾節堂（当時二十五歳）である。

このうち、内山愚童は、かねてから社会主義の影響をうけ、「大逆事件」の前年に『無政府共産』なる小冊子を配布して柴庵同様「新聞紙条例違反」で逮捕・投獄された「筋金入りの主義者」であったが、高木顕明と峰尾節堂は、赤ひげ医師大石誠之助から社会主義の手ほどきをうけた程度で「筋金入りの主義者」とは程遠かった。

もとより海旭は、これら三人の思想信条の

濃淡を知っていたわけではなかったが、内山をふくめて、そもそも仏教者が事件に連座していることが不可解に思えてならなかった。

仏教者が社会主義に共感することは理解できても、「天皇暗殺」まで企図するとは到底考えられなかったからである。実際、海旭自身、ドイツでは、社会主義者やロシアの亡命革命家たちと交わって、社会福祉などについて大いに啓発をうけた。しかし、帰国してから、社会をよくするために天皇の「善政」を願うことはあっても、そのために天皇を弑することなど考えられなかった。そもそも日本の仏教者には、「大化元年孝德天皇詔」以来、「神権天皇制の庇護」を受ける限りに関して仏教は存在を許されてきたという「前提的理解」がある。各宗派の「学林」でもそう教えられ、海旭もふくめ、事件に連座した三人の僧たちも同様のはずであった。

したがって、仮に仏教者が社会主義に影響を受けたとしても、天皇制を疑いそれを根底

から覆すことまでには至らない、と海旭は「わが事」として確信していた。

実際、三人のなかで、「筋金入りの主義者」であった内山愚童ですら、檢察当局から「オヤジ（天皇）よりセガレ（皇太子）をやつつけた方が効果的」と周囲に放言したことを聞いた質されても「暴力革命ではなく総同盟罷業（ゼネスト）を想定していた」と言下に否定している。従容として処刑台へ向かったことからしても、それは本心で、減刑を期待して嘘を言ったとは思えない。愚童は「筋金入りの仏教社会主義者」ではあっても、無政府主義のテロリストではなかった。

この海旭の「仏教者が天皇暗殺を企図するはずがない」という疑念は、実は「大逆事件」の「不都合な真実」を図らずも突いていた。世にいう「大逆事件」とは幸徳秋水を首魁とする「爆裂弾製造事件」を奇貨として、社会主義者とその同調者を一掃するためにでっち上げられた国家的な暗黒裁判・冤罪事件で

あったことが、事件発生から半世紀近く経過した戦後によりやく明らかになるからである。すなわち実際の「事件」としては、幸徳秋水を「企画者」として、長野県明科で大工の宮下太吉が爆裂弾の試作に成功、天皇行幸の際の投擲順を管野スガ（須賀子）、新村忠雄、古河力作らと語ったという「図上演習事件」でしかなく、しかも現実に実行されたわけでもない。しかし、これをつかんだ当局は、秋水の思想的影響を受けていた地方の社会主義者たちを一網打尽に使えろと判断。そこで、秋水が「革命放談」をして歩いた、箱根の内山愚童グループ、柴庵の盟友である大石誠之助を中心とする紀州グループ、「大阪平民新聞」グループ、「熊本評論」グループをつなげて、その間に「天皇暗殺、国家転覆の共同謀議」があったとして、つくりあげられたのが、「大逆事件」だったのである。

この歴史的大事件が「捏造」であったことは、皮肉にも、フレイムアップした側が証明

している。当時大審院検事局を率いて捜査から判決・処刑までを指揮した平沼騏一郎の『回顧録』（平沼騏一郎回顧録編集委員会、一九五五）にはこう記されているからだ。

「事件が本当であれば秋水が首魁に違ひない。先づ幸徳を捕へねばならぬ」「幸徳が逃げるやうなら事件は確かである」「私は彼らの信念が犯罪の動機であると論じた」「今のやうにあんな大事件を取り扱つたら（略）十年はかゝる」「あの事件で私が深く注意したことは後にみつともない証拠を残したくないと考へたことである」「被告は死刑にしたが、中に三人陰謀に参与したかどうか判らぬのがある。（略）ひどいと云ふ感じを有つてゐた」（前掲書五九―六一頁）

平沼はその後、検事総長として檢察トップに上りつめた後、司法大臣をへてついに第三十五代内閣総理大臣に就任、人臣位を極める。おそらくそれは「大逆事件」なくしてはありえなかったことだろう。（つづく）

法然上人鑽仰会[講演会]のお知らせ

講師 石丸晶子

法然上人とお弟子たち

いしまる あきこ

1935年東京都生まれ。国文学者、文芸評論家。東京大学文学部卒、同大学院人文科学研究so博士課程修了。東京経済大学名誉教授。著書に『面影びとは法然—式子内親王伝』(朝日新聞社)、『歴史に咲いた女たち—源氏の花 平家の花』(廣済堂出版)、『法然の手紙』(人文書院)、『お手紙からみる法然さま』、小説『月影の使者』(上・下)(浄土宗出版) ほか多数。



会場 東京芝大本山増上寺 慈雲閣
1F ホール

東京都港区芝公園4-7-35
地下鉄都営三田線御成門または芝公園下車徒歩5分
都営浅草線大門下車徒歩5分
JR浜松町徒歩10分

2018 6月22日(金)

午後1:30開場 午後2:00開演 (3:30終了予定)

会費 1,000 円
当会会員無料

問い合わせ先

法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4 明照会館 4 階 tel 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

151

かい目

さっちゃんねネッ

かまちのよろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)

梅雨空に男は左と象香炉

岱潤

四月四日、大相撲の巡業場所、舞鶴場所にて、舞鶴市長が土俵上にて挨拶の途中突然倒れた。近くにいた看護師の女性三名は一刻を争うことから、土俵に駆け上がり応急処置をされた。その介があつて市長は一命をとりとめたわけだが、その時とんでもないアナウンスが館内に流れた。

「女性の方は土俵から降りて下さい」

さすがにこのアナウンスには反響があり、「不適切なアナウンス」と言われるようになったが、次の巡業場所宝塚市では女性市長は土俵に上がることが出来る

土俵下で挨拶された。土俵は「女人禁制」の場所であるからそうだ。

そして静岡では昨年まで問題がなかった腕白相撲に、少女が御法度になった。相撲協会は「少女の顔に傷が着いたら大変だから」などと言っているが、「女人禁制」に年齢は関係ないなどと言う輩の声を聞いたからだろう。

私たちも本堂に入堂するときに象香炉をまたいで入るのが正式だが、これも男性は左足で、女性も右足でと区別をしている。これは何故なのか？「LGBT」を考えると、象香炉の前に立ち止まってしまう人も出てくるのではないだろうか。ならばこうした区別は必要なのだろう

うか、これは差別になる可能性はないのだろうか。伝統だ、規則だという前に、さまざまな当事者の気持ちになって、本当に必要な区別か、考えることも必要だろうだ。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十四巻六月号 頒価六百円
年費費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成三十年五月二十日
発行 平成三十年六月一日

発行人 佐藤良純
編集人 長谷川岱潤

印刷所 株式会社 映印刷
〒一〇五〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所 法然上人讃仰会

電話 〇三三五七八六九四七
FAX 〇三三五七八七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(日黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。

※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。

※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。

※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ

Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または

郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。

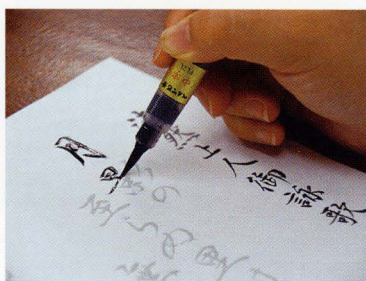


薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!!

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。